

拙僧、正義の陰陽師に御座いますれば！

20ルピー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

キャスター・リンボ風味の一般人が異世界転移するお話です。なんなら言動しかリンボ風味無いです。

目次

忘れもしませぬ、あれは拙僧がユグドラシルの住人であった頃	1
忘れもしませぬ、あれは拙僧が異世界へと転移したばかりの頃	9
忘れもしませぬ、あれは拙僧が入念な調査を行っていた頃	15
忘れもしませぬ、あれは拙僧がファーストコンタクトを取っていた頃	24
忘れもしませぬ、あれは拙僧が村に赴いていた頃	30
忘れもしませぬ、あれは拙僧がスローライフを満喫していた頃	38
忘れもしませぬ、あれは拙僧が隊長殿の苦悩を覗き視ていた頃	47
忘れもしませぬ、あれは拙僧が大森林へと乗り込んだ頃	55

忘れもしませぬ、あれは拙僧がユグドラシルの住人であつた頃

この世の地獄というものを見たことがあるだろうか？

あるとすれば、それは間違いなくこの世界の事なのだろう。

22世紀初頭から深刻化した環境破壊から今なお続く汚染によって、地球はおおよそ生物の生きていける環境では無くなつてしまつた。

工場の建ち並ぶアークロジーから噴き上がる黒煙は空を覆い尽くし、防毒マスクがなければ呼吸もままならない程に空気さえも汚染された。

垂れ流された工業廃水は海を腐らせ、空中に昇つたそれらは酸の雨を降らせる雲となつた。

そんなことはお構い無しに金と利権を得るために我が物顔で地球を蹂躪する複合企業。世界の凄惨な有様を他人事のように考えて、安全なアークロジー内部で悠々自適な生活を送る富裕層。

それに支配され、働き蜂のように、或いは使い捨ての部品のように酷使され、使えなくなれば死ぬだけの貧困層の人間たち。

底無しの人間の欲望が創り上げた地獄の如きこの世界。

それこそが、僕たちの生きている世界だつた。

そんなどうにもならない世界にも、少なからず娯楽はあつた。

科学技術が飛躍的に発展した結果、脳に埋め込んだ小型演算器と人体に注入したナノマシンを介して、あらゆる体験が出来る仮想空間が開発された。

そこでは、まだ植物が生き生きと地面を覆い尽くしていた頃の地球を歩くことが出来た。人の手の届かない神秘で満ちていた海の底にも潜ることが出来た。何ものにも縛られずに空を飛び回り、そのまま

宇宙にまで飛んで行けた。

何もかも作り物ではあったけど、縛られてはいたけれど、自由だと思える体験がそこにはあった。

そんな技術を用いられて製作されたのが、DMMORPGの金字塔とも呼ばれる体感型RPG『ユグドラシル〈Yggdrasil〉』未知を探求し切り開く。

そんなコンセプトで開発されたそのゲームは、あらゆるプレイヤーに対して平等に不親切だった。

達成目標もなければフィールドマップもなく、それどころか満足な操作説明すらされないまま仮想空間に放り出される始末。運営側がデイスラれるのも納得のクソ仕様である。

それでも『ユグドラシル〈Yggdrasil〉』が圧倒的な人気を誇ったのは、謳い文句に偽りの無い壮大な冒険と自由がそこにはあったからだ。

キャラメイクも自由、何処へ行くかも自由。

善行を積むか悪行に耽るか、財を成すか奪い取るか、既知を極めるか未知を求めめるか、勇者とその仲間か魔王とその配下か。

そこにはあらゆる選択肢と、それを選べる自由があった。

富裕層の人間も貧困層の人間も、ここでは等しくプレイヤーだった。

現実世界における優劣など関係なく、皆が輝かしい冒険の舞台へと踏み出す権利を手に、眼前に広がる未知の世界に胸を躍らせた。

そんな多くの人間に愛された『ユグドラシル〈Yggdrasil〉』は、12年の時を経て、今まさに終わりを迎えようとしている。

『ユグドラシル〈Yggdrasil〉』には9つの世界が存在する。
そのうちの世界の1つ、人間の世界『ミズガルズ』

『ヘルヘイム』等の世界には異形種にとって有利に働くボーナス効果があるのだが、それと同様に『ミズガルズ』にも人間種の能力値にボーナスが付く特殊効果がある。

人間種が大手を振って歩ける世界の城下町の大通りにあるアイテムマーケット。

最盛期であれば消費アイテムや掘り出し物を求めるプレイヤーで大変賑わっていたのだが、今では店番のNPCが何処か退屈そうな様子で佇んでいるだけだった。無論NPCに自我はないので、こちらがそう感じるだけなのだが。

それも当然だろう。

今日は『ユグドラシルへYggdrasil』終焉の日。

数多のユーザーに12年間も支えられてきたDMMORPGがサービス終了を迎える日なのだ。

こんな日にこんなところで、今後2度と使用することが無いアイテムを買い漁っている物好きはこの男くらいだろう。

1つの店舗を粗方物色して、また隣のアイテムショップに入っては売り物を吟味する。

こういう人が集まる城下町などには、プレイヤーが様々なアイテムを売りにやってくる人が多い。

「へ品物鑑定」……ン、これは神器級ゴツズですな！買いきましょう」

特に大きなイベントの後なんかは、取ったは良いけど使い道の無いアイテムなんかが無造作に売られている事がある。

今回の場合は『ユグドラシルへYggdrasil』の終わりがそれに当たる。

仮想空間での非現実であれど、これで終わるのならば身の回りの整理をしたいと考えるプレイヤーは意外にも多いようで、こうした場所

に自身の装備やアイテムを置いていくのだ。

その証拠に市場ではまず絶対にお目に掛かれないだろう神器級レベルの武器や防具、果ては課金でしか手に入らないような激レアアイテムが、どうぞ持っていてくださいと言わんばかりにそこかしこの店頭にも、しかもタダ同然の値段でこのように並んでいる。

「いやいや、神器級を爆買いなどなかなか出来ない経験ですぞ。終末世界というのも悪くないやもしれませぬなア！」

恐らくただ1人、プレイヤーが自分しか居ないだろう大通りで珍妙な独り言を話すその者は、城下町の裏路地の売店に至るまでじっくり品物を眺め、時には嬉々として買い込み、やがて街を出て何処かへと消えた。

プレイヤーネーム『DOMAM』

さて、ここで少しばかりこのプレイヤーについて話をさせて貰おう。

このプレイヤーは陰陽師というロールプレイをするにあたって、恐らく実在したであろう古の人である『蘆屋道満』のデータを参考にした。

そこから更に情報を漁りまくっていたところに出てきた戦闘行動を行う陰陽師『Fateシリーズの蘆屋道満』を最終的な芯として『ユグドラシルプレイヤーのDOMAM』というキャラクターを構築した。

彼のビルドしたキャラクターは大抵の事なら難なくこなせる、良く言えば万能な職業構成。

攻撃魔法、強化魔法、弱体化魔法、回復魔法が使える。

召喚したモンスターによる盾役やヘイト管理も出来る。

魔法詠唱者であるから近接戦闘は不得手だが、それを差し引いても多様なキャラクターだ。

しかし悪く言えば器用貧乏なキャラクターでもある。

例えば攻撃魔法は、攻撃魔法に特化したパワープレイヤーには及ばない。支援魔法、回復魔法についても同じこと。

それぞれの技能に特化したプレイヤーがパーティーを組んでしまえば、DOMANのような中途半端なドリームビルダーが必要とされることはない。

更にはクセの強い言動も相まって、誰も彼を仲間に引き入れようとは思わなかったのだろう。

故に、彼はぼっちプレイヤーだった。

「ンンン、ユグドラシルの夜空は美しいですなア」

そんな彼は今、『ミズガルズ』領域内のとある霊峰の頂上に座り込んで作り物の星空を見上げていた。雲を突き抜け聳え立つその山頂から見える空は、例え仮初だろうとも感嘆するほどの煌めきを放っていた。

時刻はもう間も無く深夜0時を迎える。

あと少しでこの作り物の星空諸共、『ユグドラシル』(Yggdrasil)は消えてしまう。

「(星占い)：ほほお、大吉と出ましたか！」

星が出ている時間帯しか使えない微妙な魔法を使用して運勢を占う。

当然、この行為になんの意味もない。もつと言うなら、サービス終了だけのゲームサーバーに最後まで残っている意味もない。

それでも彼がここにいるのは、もうここ以外に居場所が無いからだ。

貧困層の人間である彼は、今や故人である両親の努力によりなんとか小学校を卒業した。

それからは必死になって働いた。上司から腹いせに殴られようが、膨大な仕事を押し付けられて何週間も会社に泊まり込む事になろうが、我慢して働き続けた。

我慢してでも続けなければ、貧困層に未来はない。

しかし努力が報われることはなく、彼が取ってきた大口契約を上司の横槍で白紙にされ、挙げ句にその責任を擦り付けられてあっさり切り捨てられてしまった。

それが1ヶ月前の事で、ちょうど『ユグドラシル〈Yggdrasil〉』のサービス終了が発表された日の事だ。

「……ここが失くなれば、僕は終わりかあ」

気に入っていたロールプレイも忘れてぽつりと呟く。

『ユグドラシル〈Yggdrasil〉』が終われば、今度こそ彼には何も無い。

就職先を捜そうにも、世間的には会社に大損害を与えてクビになった彼を受け入れる場所はない。

間も無く貯金も底をつく。そうなれば現実の住居から出て行かなくてはならない。外に放り出されれば毒霧と酸性雨にやられてしまうので、長く生きてはいけないだろう。

貧困層の人間が職を失うということは、緩やかに死んでいく事と同義である。

「いっそ、このままユグドラシルと消えられたらいいのに」

頑張っても報われなかった現実なんて見たくない。

せめて楽しかった思い出の中で終わりたい。

心の底からそう思っているからこそ、彼は今ここにいます。

数多の未知があった。それを踏破する冒険があった。

それなりにフレンドもいた。最後まで何処にも所属することはなかったけれど、1人でダンジョン攻略に勤しんだり、自由に九つの世界を巡る旅をした。

なんとあのワールドアイテムを発見したこともあるのだ。結局、見つけた内の殆んどは横取りされたけれど。

そのうちの1つはなんとか護りきって今も手元に残してある。あの空中都市ギルドの連中から逃げ切れた事は、彼の数少ない自慢でもあった。

そうそうギルドといえば、件のDQNギルドのメンバーと友達になれたことも自慢できることだった。

欲しいデータクリスタルを落とすモンスターの奪い合いが切っ掛けだったのはよく覚えてる。

話してみれば全然普通の人で、それから何度も狩り場で待ち合わせでモンスター討伐に赴いたものだ。引退すると聞いてからは連絡が取れなくなっただけで、元気にしているだろうか。

燦然と輝く思い出が、次々に溢れ出てくる。

「楽しかった。ああ、本当に……楽しかったんだな」

目を閉じれば、溢れ出たそれらが脳裏に浮かぶ。

もう思い出になってしまった、綺羅星のような目映い日々。

これがあれば、間も無く訪れる最期も恐ろしくない。

きつと胸が弾むような楽しい気持ちで、この世を去る事が出来るだろう。彼はそう確信していた。

「…時間かぁ」

視界の端に映る表示が23:59:50となる。

もう覚悟を決める頃合いだ。

最後の最後で彼は、D O M A Nとして立ち上がり『ミズガルス』全

体に響かせるつもりで、大きく大きく声を張り上げた。

「拙僧の人生！ユグドラシルでの全て！」

「これにて！これにて！」

「ンンンンン！おさらばで御座います！！」

光の時、これまで。数字の全ては0へ還り、世界樹の葉は遂に切り落とされた。

世界は終わったーハズだった。

「ンえ？」

言いたいことを言いきって、再び目を開けたDOMANの眼前には、自室でも星空でもなく。

何処とも解らぬ鬱蒼とした森林が広がっていた。

忘れもしませぬ、あれは拙僧が異世界へと転移したばかりの頃

「……状況を整理致しましょうか。

まずログアウトに関して。

コンソール、開かず。何度手を翳そうと反応は無し。

ゲームマスター運への救助要請、応答無し。

緊急脱出コマンド、反応無し。

現実リアルでのヘッドギア取り外し。はて、そもそもヘッドギアは何処へ？
ええ、無為に時間だけが過ぎました。

そもそも最終手段である緊急脱出が反応しない時点で、ゲーム内では打つ手無し。

これで後々ナノマシン補給アラートが鳴らなければ完全にお手上げですな。

次に現状について。

眼前には生い茂る木々の群れ。見渡す限りの森。時間帯が深夜であるから相応に暗く、辛うじて月明かりが薄っすら辺りを照らす程度。

それはいい。ユグドラシルにもこのような雰囲気の場合は幾らでもあった。問題はそこではなく…。

「臭いがしますなア」

森の臭い、とでも言うのだろうか。

現実世界では当然嗅いだことなどあるはずもないが、これがその臭いだという奇妙な確信があった。

試しに、足下の草をひと摘み。

大した抵抗もなくぶちりと千切れる感触が手に伝わってくる。
近づけてよくよく観察すると、断面からじわじわ汁が滲み出てきて
おり、触れてみれば僅かに濡れたような感覚が指先にあった。

「味も見ておきましようか……ンンツ苦い」

ユグドラシルを含めた仮想空間では有り得ない体験だ。

現実とゲームを混同しないように、仮想空間内では味覚、嗅覚、触
覚の再現には厳しく規制が掛けられている。

そもそもゲーム内での感覚を現実と寸分違わぬクオリティで再現
するなんてことは、現代の技術力を結集させたとしても出来るか怪し
いところだ。

法的にも技術的にも、現実的でない事が起こっている。

「……拙僧もしや、異世界転生しました？」

ほとんど冗談で呟いた一言だったが、不思議なことにそれが一番納
得できる仮説だった。何を馬鹿なことをと思われるだろうが、現状の
感覚がゲームでのそれとは明らかに違う。

これが現実だ。そういう認識が既に脳内に存在していた。

何れにせよ、異常事態であることには違いない。

どうにか状況を把握したいと考えていると、ふと閃いた。

この身体はユグドラシルでのアバター『DOMAN』のものだ。装
備からなにもユグドラシル最後の時のままで、一通りの動作にも問
題はなかった。なんなら現実の肉体なんかよりもずっと軽く強靱ら
しい。

そして『DOMAN』は、主に符術を中心とした職業構成を徹底的
に追求した精神系魔法詠唱者。

もし魔法が使えるとしたら、周辺の情報くらいならすぐに手に入る
かもしれない。

「ええいままよ！来たれ我が式神よ！」

出来なかつたらただのイタイD O M A Nだ。

そんなことを思いつつ魔法を唱えると、何処からともなく1枚の符が出現した。

気付けば手に握られていたそれは、ぽんと煙を上げて1羽の黒い鴉へと変化する。

「で、出来た…！」

リングコマンドが表示されないからどうなることかと思つたが、ユグドラシルでの位階魔法は使用できるらしい。

それどころか、わざわざコンソールを開いてリングコマンドから選択せずとも、感覚だけで修得している魔法が使えるならば寧ろ手間が減つて良いまである。

ひとつ発見があつたところで、更なる発見のために召喚した鴉を飛ばす。追加で鴉を29羽、地上からの索敵として猟犬を30匹ほど召喚し、周囲に解き放つた。

「召喚した式神との感覚連結…：問題ないようですな。何かあれば即座に報告してもらおうとして、此方も一先ずの拠点を用意しなければ」

流石にいつまでもここに立っているわけにはいかない。

確かアイテムボックスに拠点作成系のアイテムがあつた筈だが、この場合アイテムボックスは何処にあるのだろうか？

先程の魔法を使用した時のように、アイテムボックスを意識しながら手を動かしてみる。

すると、なんと手首から先が何も無い空間に沈み込んでいくではないか。思わず手を引っ込めそうになったが、ここは我慢して目当てのアイテムを探す。

すぐに手に何かが握られているような感覚がしたので引き抜いて

みると、そこには拠点作成系アイテムを握りしめた自分の手があつた。

「どうやら魔法同様に、アイテムボックスの仕様も感覚的に行えるようだ。」

「……便利すぎるのも逆に気味が悪いですなア」

手に持ったアイテムを地面に設置する。

すると瞬く間に成長するようにそれは巨大化し始めて、止まった頃には3メートルくらいの立方体となっていた。

『石の隠れ家』と呼ばれるマジックアイテム。その1面に埋め込まれるように取り付けられている木製のドアを押し開けて中に入る。

見た目は非常にコンパクトだが、その内部はそれに全く釣り合わないくらい広く、巨人種のモンスターが寝転んでも余るほどだ。入り口を潜れるかは疑問ではあるけど。

取り敢えずはこれで落ち着ける。

備え付けの椅子に腰を下ろすと、どっと疲れがのし掛かってくるようだった。疲労無効のスキルは取得しているので、精神的な疲労が原因だろう。

「……はア、寝てしまいたい。しかし寝たら我が式神たちとの繋がりはどうなるのやら……いやそもそも寝れるのですか？睡眠不要のスキルを取っていた場合は……そういえば食事も必要なかった気が……ンンンン!!」

考えること、確認すべき事は山積みだ。

どのみちしばらくは寝られそうにない、そう項垂れそうになったときだ。

不意に何かに呼び掛けられた感覚があつた。

その感覚を辿ってみると、呼び掛けたのは召喚した式神の鴉——式鴉とでも呼ぶとしましょう——の1羽らしかった。

どうやら早くも何かを発見したらしい。

この短時間で成果を挙げるとは、もしかして拙僧より優秀なのでは？

「ともあれ、まずは確認をば…〈視覚連結〉」

途端に視界が切り替わる。

目の前の光景と式鴉の視認している景色が同時に映っているようで多少酔いそうだったが、魔法自体に問題はないようだ。

さて、式鴉が視ている景色に集中してみる。

「これは、村ですか？」

式鴉は空を飛んでいるのだろう。

眼下に広がる光景には、砦というにはあまりに質素な柵に囲われた木造の建物がぼつぼつと点在している。

式鴉をもつと近付かせてみる。

村の中には石造りの井戸があった。それを汲み取るための木のバケツと滑車。

野菜のようなものが植えられている畑、金色の穂を実らせた小麦畑、一見ただの草にしか見えないものが植えられた畑があった。

明らかに文明が存在している。

文明レベルとしてはユグドラシルの世界観に近いだろうか。確か既存NPCたちがこのような村に住んでいたように思う。

住んでいるのはどういった種族なのだろうか？

夜中に外に誰もいないところから、恐らく皆寝ているのだろう。接近させてみたいが、起こしたり不要な警戒をされてしまうと考えて止めておいた。

「ンンン…式鴉は待機させるとして、この村に関してはまた明日に調べるとしましょう」

〈視覚連結〉を解除して、村の監視に式鴉と式犬を数体つけて残りは引き続き付近の捜索に回した。

そういえば、召喚時間はどうなるのだろうか。

元々倒されるかMPが尽きるかしなければ継続して召喚を維持できるパッシブスキルを取得しているから、早々消えることはないのだろうけど、この世界とユグドラシルのルールが全く同じとは限らない。検証はしておくべきだろう。

DOMANは基本なんでも出来るが、その中でも符術師や陰陽師としての召喚能力に力を入れていた。

もし召喚時間に問答無用で制限が掛かってしまうなら、今後の身の振り方をもっと慎重に選ばなくてはならないだろう。何せ戦術の半分は潰されてしまう訳だから。

「考えるのも…まア、日が昇ってからにでもしましょうか」

それにしても今日は疲れた。問題への対策は後回しにしても構わないだろう。

「折角ですし、ええ、睡眠中の召喚モンスターの状態変化を記録するために、少しばかり寝させて貰うとしましょう」

椅子の背もたれに身体を預けて目を瞑る。

不思議なことに、妙な心持ちであったにも拘わらずすぐに睡魔は襲ってきた。どうやら睡眠不要でも寝ることは可能らしかった。

こうして、DOMANの最初の1日は終わったのだった。

忘れもしませぬ、あれは拙僧が入念な調査を行なっていた頃

「朝で！御座いますれば！」

実に清々しい目覚めでした。思わず誰もいない部屋で大声を上げてしまうくらいには気持ちのいい朝を迎えられて、拙僧は昂っております。

椅子に腰かけたまま眠りこけたにも拘わらず、頭はすっきり冴え渡り、疲れなんて一片も残っていない。

リアルでは味わったことのないこの感覚、拙僧は今、猛烈に感動しておりますれば。

そして、寝て起きたら現実世界に戻されてた、などという事もなく。やはり今いるこの世界こそが夢などではなく、儂にとつての現実につき換わっている、と確定しても良いでしょう。

更にもう1つ。召喚した式神は今なお現存している。

召喚者が睡眠状態に入っても帰還することはなく、また召喚モンスターを維持するパッシブスキルも問題なく発動していたらしい。

召喚モンスターに関しては、パッシブスキルによるMP切れでの帰還の心配もあったが、自身のMPを確認したところによれば依然満タンを維持している。

「ンン、これならば『ワールドアイテム』も正常に稼働しているとみて良さそうですね」

召喚術と『ワールドアイテム』。

拙僧の切り札のうちの2つに何の異常もないのは僥倖であった。これならば『ワールドデイズター』のような広範囲高火力の魔法を連発してくるような輩でなければ、安全に勝利を収めることが出来る

というもの。

『ワールドアイテム』に関してはまた後ほど自慢…シン失礼、説明させていただくとして。

「さて、さて。件の農村はどうなりましたかな？」

深夜に式鴉が発見した村の様子を探ることとした。

壁掛け時計を見れば時刻は午前6時きっかり。農業は早い時間に仕事をする、と聞き齧った知識で知っていたので、ならばもう誰かしらは働いていると踏んでの選択だ。

〈視覚連結〉で再び式鴉と視界を繋ぐ。

「おおオ……これは、なんと……」

そうして思わず、その朝日に照らされた大地に目を奪われた。

昨晚見たあの小麦は、比喻ではなく黄金のような輝きを放っていた。村より遥か遠くに流れる河は、小麦とは異なる銀の光を湛えていた。

何より、地平線の向こうまで延びるこの大空の、煌々と降り注ぐ陽光の、なんと壮大なことか。

最初に視たときは暗かった上に、それを心に染み込ませるだけの余裕もなかったが、今ならば分かる。

この世界は今まで見た何よりも美しい、リアルの誰もが夢見た場所なのだ。

「……………おおっと、儂としたことがなんたる……景色はまた後でじっくり堪能するとしましょう」

一瞬、本気で村の観察を忘れかけたD・O・M・A・Nは、気を取り直して

農村に視線を戻した。

式鴉を数羽操り、それぞれ村を囲う柵の上や民家の屋根に留まらせる。

村の全てを同時に観察するために、それぞれの式鴉と〈視覚連結〉をして村の様子を探り始めた。

DOMANの読み通り、村の畑には既に人の姿があった。

そう、人である。亜人種でもエルフでもなく、人。

我々が一般的に知る人間という種族が、野菜畑の雑草をせっせと抜いていたのだ。

性別は男。歳は30を過ぎているだろう。

服装は質素な布製のもので、所々縫って直した痕がある。あまり裕福ではないのだろうか。

露出した腕をみる限りではそれなりに筋肉質ではあるものの、戦闘力の観点から言えば全く強そうには思えない。

マジックアイテムを複数併用し、試しに男のレベルを測ろうとしたところ……診断結果はなんとLv. 4。

「ンン……ンンンンン？」

これには流石に目を疑った。

そもそも防御される前提だった事もあり、あっさり測れてしまったことにも驚いたのだが、幾らなんでも弱すぎて2度驚愕する羽目になった。

続けて職業レベル看破のマジックアイテムを追加で使用したところ、フアーマーの職業しか取得していない事が判明した。

「はて、蘇生でもしてレベルダウンしたのでしょうか？しかしそれにして……」

まさかと思い、他の式鴉に視覚を移して別の村人を観察する。
今度は井戸から水を汲んでいる10代半ばくらいの女性だ。
同じようにしてレベルを測ると、なんと先程よりも低いLv. 1。
こちらも同じくフアーマーの職業だけしか取得していなかった。

「……………マジですか？」

弱すぎる。それが率直な意見でした。

この村の標準がこの数値ならば、召喚した式鴉1羽でも殲滅できて
しまうのではなからうか？

下手すれば拙僧が触れただけで爆散してしまうやも……………え、しない
よね？

そもそもこんな低レベルでは死んだとしても、上位の蘇生魔法でな
ければ復活は叶わない。拠点でのリスポーンであれば話は別ですが。

「魔法が存在する世界なのかも疑問に思えてきましたな」

可能であれば本日中にフーストコンタクトを取っておきたかつ
たが、どうやらそう簡単にはいかぬようで。

怪しまれることは確定だとして、それ以外の認識の齟齬は可能な限
り無くしておきたいところ。

もしこの世界で魔法を使えるのが拙僧だけだとしたなら、下手に振
る舞えば厄介ごとを引き寄せるのは火を見るより明らか。

最悪、魔王のような扱いを受けてしまうやもしれぬ。

元ネタのリンボはともかく、一般人inの拙僧は人類悪ビーストと成る気は
さらさら御座いませぬゆえ、ええ、本当ですとも。

敵を増やすなど愚の骨頂。皆々様分け隔てなく仲良く手を繋いで
にこにこ笑顔で……………とまでは申しませぬが、争わぬに越したことは
ないでしょう。拙僧、平和主義者に御座いますれば。

話が逸れました。

要は面倒を避けるために更なる情報収集に勤しみましょう、という話です。

「ここから更に搜索範囲を拡げていきましょう。では、新しい式神を拵えましょうねエ」

魔法とスキルを駆使して式鴉、式犬を次々と量産し、外の世界へと解き放つ。ついでに周囲には式蜘蛛を配置して、接近してきた何者かがいした場合にも反応できるように備えておく。

無論、式神達には戦闘行動は極力控えるように指示を出してある。

「さて、では拙僧も」

アイテムボックスから大きな長方形の紙を取り出して、その左上の角に方位を示す記号を書き込んだ。

そして紙の中央に魔法筆で小さく現在地を記し、その周りを森を示すつもりでぐるりと円を描く。更にそこから少し離れたところに先程の村の事を書き込む。

「大雑把ではありますが、地図を作っておきましょう。今後の指標の為にもあって損はないですからな」

それから少しずつ、式神達から齎される情報を頼りに地図を更新。また他に目ぼしい情報が入り次第別紙に情報を書き記していく作業が始まりました。

地図など描いたことはありませんでしたが、拙僧にかかれればこれこの通り。自動マッピングが如き素早さでどんどん紙が埋められていっておりますぞ。ええ、拙僧多才なれば。

このDOMANの肉体。どうやら身体能力に留まらず脳の作りもリアルのそれとは比較にならぬようで、情報処理能力が素晴らしく良

い。頭にスパコンを押し込まれたようです。

これならば今晚にも周辺の精巧な地図が出来上がる事でしょう。

(しかし、書き物というのもなかなか楽しきこと。リアルでは紙に触れる機会などそうは無かった。そういえば、この世界に書物などはあるのでしょうか？であれば是非とも手に入れて読み耽ってみたいものですぞ)

紙の書物などリアルでは富裕層のモノでしたがゆえ、拙僧1度でいいから本を手を持ち読書などしてみたかったです。

これがひと段落した暁には、アイテムボックスから何冊も見繕って読んでみるというのも一興。

可能であればこの世界の書物などもコレクションに加えたいところですが、はて、言語形態はやはり異なるのでしょうか？

そんな事を考えている間にもマッピングは着々と進んでいき、気が付けば時刻は正午を回っていた。

「ンン、昼餉の時間ですな」

とはいえ、飲食不要のスキルを所有しているため腹が減ったわけでもなく。しかし1度気になると不要とはいえ何か食わねば据わりが悪い。

そこでマツピングを一旦中断して、アイテムボックスから木の実をひとつ取り出した。

まるで今しがた木から掬いだばかりのような瑞々しいその林檎のような果実を、正常に物が食えるかの実験も兼ねて、試しに一口。

「ンンンンンンンンッ！甘酸っぱあい!!」

美味だった。

堅すぎずしかし柔すぎるわけでもない、ざくりとしたしつかりとした食感に、口から溢れんばかりの果汁。たったひと齧りでの圧倒的満足感。全部食べてしまえば、どうなってしまうのでしょうか。

「ンンンンツッ！ご馳走様ア!!」

めっちゃ美味だった。

正直まだ食べたくなってしまうたが、無限にあるわけでもないのここは我慢する。栽培方法なんかを真剣に検討しなくてはならないと思えた出来事だった。

そんなことを挟みつつ、地図の作成と情報収集を続けていくと、あっという間に日が暮れてきた。式神を通して見た景色には、西の山々へと沈んでゆく太陽が見えております。

ちようど区切りもよいことですし、本日はここまでとしましょう。式神達は到達地点の周辺に待機させ、また明日から頑張つて貰うことにしました。

地図の方も南方に限れば粗方出来上がりました。

どうやら拙僧の迷い込んだ場所は、森林と呼べるほど深くはない森のよう。脅威となるほどのモンスターもおらず、いても精々が蛇や熊ほどの野生動物。それも我が式神を見た途端に逃げ出すようなものばかりでした。

そして南の方へ向かえば、最初に見つけた農村が。

そこから更に南に式神を進めると、同じように畑を作っている村が幾つか点在しておりました。

そこに住んでいる人間のレベルなども測ってみたが、やはり1桁より上はおりませんでした。最初に見つけた村が特別弱かったわけはなかったのですな。

それよりも重大な収穫がありました。

なんと、この世界にも魔法は存在しておりました。

しかしながら、それは拙僧のよく知る位階魔法とは些か趣が異なるようで。

例えば僅かな調味料を生み出したり、ロウソク程度の炎を指先に灯して薪に火をつけたり、家畜の牛に魔法を掛けると途端に乳の出が良くなったりと、日々の暮らしを助ける程度のささやかな魔法。

ユグドラシルというゲームの世界だからこそ無かった、人の営みのなかで役立てることに重きを置いた魔法。『生活魔法』とでも名付けましょうか。

ただ発動の際にはユグドラシルと同様に、手元に円形の魔方陣が現れておりました。

拙僧の知る魔法とも何かしら関連があるのやも知れませぬな。

それはそれとして、依然としてここがどのような世界なのかは不明です。

地名などが解れば考察のしようもあるでしょうが、村の方々からはそのような話は聞こえず。

唯一聞こえてきたのは、一番最初に見つけた村にて

『神官様がまだいらっしやらない、いつまで保つのか』

というものが1つ。

神官様、という存在がいる。つまりは神に遣える立場の者がいて、何かしらの宗教的概念がこの世界には存在するということ。

リアルではキリスト教や仏教などがありました。もしそれと酷似した神が信仰されているとすれば、それはリアルとの関わりがあるかもしれない世界ということになりましょう。

「ともあれ、判断材料がまだ足りない。あと2日…いや3日ほどは情報収集を行ないたいところ」

更に搜索範囲を広げるか、場所を絞って細かな情報を広い集めるかを悩んでいると。

「…ん？なんですかな」

式神から呼び掛けられる感覚があった。

それも広範囲に展開させた式鴉や式犬ではなく、周囲の森に配置した式蜘蛛の方からだ。

式蜘蛛には、何者かが接近してきた場合に連絡するようにと命令を出していた。つまり、この森に侵入した者がいるということだろう。

即座に連絡を入れた式蜘蛛と〈視覚連結〉を行い、その視界を覗き視る。

「…はて、間も無く夜の帳が落ちようというのに」

そこに映った者の姿を視て、DOMANは首を捻ったのだった。

忘れもしませぬ、あれは拙僧がファーストコンタクトを取っていた頃

間も無く日が暮れる。

そんな危険な時間帯に森に入ってきた小さな人影を、式蜘蛛の目を通して観察しております。

「ンンン、このような場所に何用でしょうか？」

式蜘蛛の視界の先、そこにいたのは年端もいかぬ子供でありました。

どうやら此方には気が付いておりませぬようで、地面に目をやりキョロキョロと。何かを探しているのでしょうかね？

見たところ装備とも呼べる装備はなく、近隣の村の者達のような布の服を身につけておりまして、手には何やら革製の袋をひとつ握り締め。

採集にでも来たのでしょうか、こんな遅い時間に。

まだ光は差しているが、それでも森の中は目を凝らさなければ雑草か薬草かも判別出来ぬ程度には薄暗い。もうじき足下も見えぬようになるだろう。

そもそも拙僧には害にならないというだけで、この森には熊やら蛇もいる。いくら幼子とはいえ、近隣に住んでいるならば危険だということくらい知っていそうなものだが。

何かやむを得ぬ事情があるのやも知れませぬな。

「……ふむ、では行きますか」

拙僧こう見えて慎重派ゆえ、あと2、3日ほどは周辺の様子を探り、その後によのような立ち振舞いをするか考えようと、つい先程までは

そう思っております。

ですが、ええ、やめました。

慎重派というのは嘘では御座いませんが、それはそれ。偶然とはいえ世を知る切っ掛けが向こうからやって来たのであれば、今こそ動くべき時なのでしょう。

どうやらお困りの様子ですし、拙僧が問題解決の手助けなどすれば上手く取り入ることが出来るかも知れませぬ。

幸いにも相手は子供。しかも脅威となり得るレベルでないのであれば、万が一に敵対したとしても対処は容易。無論そのような事にならないのが理想なのですが。

「さてさて、吉と出るか凶と出るか」

—————

『神官様がまだいらっしやらない。いつまで保つのか』

母親が近所の住人にそう言ったのを、少女はこっそり陰で聞いていた。

きつとお婆ちゃんのことだ、と少女は思った。

少女の祖母は体調を崩してしまい、前の月までは食べれていたスープもあまり喉を通らないようだった。

母親は少女に、祖母のことは心配しなくても大丈夫だと伝えていたが、それは少女を不安にさせないための嘘だった。

この村には病を癒せる神官がない。数年前までは常駐の神官がいたのだが、神都の方で起こった事件の影響で招集がかかって以来

戻ってきていない。定期的に村に訪れる神官たちもいるがそれも月に一回程度。次にやってくるのは恐らくまだ先だろう。

勿論、少女はそのような難しいことは分かっている。

分かっていたのは、早く何とかしなければ大好きなお婆ちゃんはずっと元気がないままだ、ということだけだった。

だから薬草を採るために、少女は森にやって来た。

以前、少女が腹を下した際に祖母が森で採ってきた薬草で治してくれたというのを覚えていて、きつと薬草があればお婆ちゃんも元気になってくれるはずだと考えたのだ。

母親には森に入らないようにきつく言われていた。

森から出てくる狼や蛇が怖いものだということは、当然少女も理解していた。

しかし祖母への想いと薬草を採って来る事への使命感で、母親の忠告は既に何処かへと吹き飛んでしまっていた。或いは、祖母にはあまり時間がないと直感的に感じ取ったからこそ、このような場所に危険を顧みずにやってきたのかもしれない。

だが、どんな立派な想いを胸に秘めていたとしても、ここにいるのは齢五つになったばかりの子供。

戦う術も持たなければ生き延びる方法さえ知らない、人外の領域に無邪気に踏み込んできた憐れな弱者でしかなかった。

「——あつ」

のそり、と少女の行く手を遮るものがあつた。

暗闇に吞まれつつあつた森林の中でも、その姿は少女の目にはつきりと映っていた。

大きな熊だった。

といつてもモンスターというわけではない。どこの森にもいるだ

ろう、この世界の成人男性なら数人がかりでギリギリ追っ払える程度の、森の中では弱者に位置付けられるただの熊だ。

しかしながら、少女にとって脅威である事実に変わりはない。

そして間の悪いことに、熊は腹が減っていた。

餌を求めて彷徨っていたところに、いかにも無抵抗で狩りやすそうな少女がやってきてしまった。

木の実よりは腹が膨れるし、兎よりも狩りやすい。なるほど、今の熊にとっては絶好の獲物である。この時点で運命は決まったようなものだった。

「ひ…」

ここで改めて母親からの忠告が少女の頭に反響するが、もう出来ることなど何もない。

たとえ泣き叫ぼうが逃げ出そうが少女はここで無慈悲にも食い殺され、明日にでも行方を探しに来る村の大人たちが残骸の一部を発見する。そんなありきたりな運命が待っていることだろう。

無論それは、この男の介入がなければの話だが。

「おやおや、これまた妙なところに^{でくわ}出会してしまいましたなア」

まるで初めからそこにいたかのように、その男は立っていた。珍妙で悪目立ちしそうな格好の癖に、すっかり日の落ちた森の闇に溶け込むように。

「シンン、なんと言いますか、こう、ピンチに駆け付けなくては介入出来ない決まりでもあるのですかな？ 異世界転生とは」

他人が聞けば間違いなく首を傾げるだろう変な事を呟きつつも、又ルリと少女と熊の間に立ち塞がる。

力関係が一方に傾いたことなど理解できない熊は、腹から響く空腹感に堪えられないとばかりに、より手頃な場所にやってきた大きな獲物に向かって雄叫びを上げながら突進していく。

「おや、逃げないので？では仕方ありませんねエ」

少女は恐怖で固まっているが、男の方は呑気なものだ。何処からともなく取り出したのだろう、1枚の文字が書かれた紙を熊に突き付け一言。

「〈絶命符〉」

紙が奇妙な黒い炎で燃えはじめた、その瞬間。

突撃してきた熊が、勢い良くスツ転んで木に激突。

腹を見せたままピクリとも動かなくなってしまった。恐らくもう2度と起き上がることはないだろう。

「ふうむ、1番位階の低い即死魔法でもレジストされず。いやまあ、分かりきっていた事とはいえ、命の終わりというものはなんとも、儂いものですね」

ここで珍妙な男は、今まで置いてけぼりだった少女に真つ正面から向かい合った。

びくりと少女は肩を震わせ、男の顔を恐る恐る見上げた。周囲の闇よりいっそう深い黒と目が合った。

「ああいえ、怖がることはありませんぞ。

拙僧は法師にして陰陽師。名をリンボと申す者。

遙か彼方よりの旅路の途中、この森に立ち寄った次第にて。お怪我が無いよう何よりですな」

た。恐らく誰の目から見ても奇妙な男が、胡散臭い笑顔を浮かべてい

忘れもしませぬ、あれは拙僧が村に赴いていた頃

突然ではありますが、拙僧、自分でも怪しい様相である自覚はあるのです。

特にこの異世界では、どうやら洋風の衣服が一般的であるようですが、このような一般的な陰陽師を連想させる狩衣かりぎぬなどの装いであれば、ええ、不審に思われるのは当然かと。

ああいえ、拙僧のは改造しすぎて最早狩衣とは呼べぬ代物でしたな、失敬失敬。

…怪しいのはそこではない？どの面下げて左向いてるんだ？

はて、何のことやら。皆目見当がつきませんねエ。

そもそも拙僧ご本人様では御座いませぬので。

ンン、話が逸れましたな。

そうでなくとも夜の森。突然出てきて熊を仕留めた人間など、警戒されて当然だと思います。

当然のはず、なのですがね…。

「りんぼすごーい！かみのけるくるだー！」

「ンン、それは良う御座いました。しかしアンシイ殿、髪を引っ張るのはお止めなされ。鈴が取れてしまいますゆえ」

「とんでるかみだー！なんでとんでるの!?なにこれ！」

「これなるは拙僧の防御符術にて…：ああお止めなされ、符を取ろうと暴れるのはお止めなされ。落ちてしまいますぞ」

喉元過ぎれば熱さを忘れる、とはこの事なのでしょうね。

最初こそ怯えておりました幼子、アンシイ殿ですが、警戒を解こうとちよつとした符術を披露したところ、どうやらそちらに興味を引かれたようで。

結果的に肩車をして差し上げるまでに仲良くなりました。しかし

まあ、なんとも無邪気で怖いもの知らずな少女ですこと。
だからこそこんな森に1人でやってきたのでしようが、もう少し人を疑うことを覚えなくては足下を掬われてしまいますぞ。

今は森を出て、彼女の住む村に向かって歩みを進めているところで御座います。

手ぶらでは申し訳ないので、さつき仕留めた熊を土産に。少女によれば毛皮は重宝することなので、式犬達に運ばせております。

「ねーりんぼ、おんみよーんってなにをするの?」

「オシムヨウツ陰陽師で御座いますね。通常ならば地相や占筮などを行う神職の一種だったかと。拙僧のような陰陽師であれば、主に後方支援による味方の強化や……」

「んー?」

「ンン、色々な事が出来る魔法詠唱者で御座います」

「そうなんだー。じゃあほーしつてなあに?」

「法師とはつまり、御仏の有難い教えを伝える者のことです。神官の親戚みたいなものですかねエ」

「ちゃんとしんかんさままっついていわなきやだめだよ、りんぼ。おかあさんにおこられちゃうんだから」

「これはこれは、失礼いたしました。まあ、拙僧は神官様とは違って、神様を崇拜しているわけでは御座いませんで、法師というのは聞き流していただいて構いませんぞ」

まだ到着するには時間があるので、こうして少女との会話を楽しんでおります。

思えばこうして誰かと取り留めのない会話に興じるのも、随分と久し振りのような気がします。

リアルではクビになってからの1ヶ月は誰とも口を利きませんでしたし、ユグドラシルでもぼっちでしたからね。フレンドも1人残らず引退しておりましたし。

原理は分かりませんが、この言語の自動翻訳機能には感謝しなくてはなりませんね。言葉と口の動きが噛み合っていないので、なんとなくにそういうものがあるのだろう、程度に考えていますが、いずれはこの件も深掘りしていきたいですねエ。

「あつ！ねえ！りんぼつてしんかんさまみたいなまほうつかえるの？」

「ンンン、拙僧これでも〈大僧正ダイソウジヨウ〉のクラスを修めていますので、回復魔法でしたら問題なく。HPの回復は信仰系に劣りますが、バッドステータスの解消はお手のもので御座います」

「びよーきもなおせる!?!」

「勿論で御座いますとも」

「あのね！おばあちゃんげんきなくて、びよーきかもしれないなくて、たまねぎすーぷものこしちやつて、えつとえつと…」

「なんと、お婆様がご病気に？それはいけません、いけませんねエ」

と、口には出したものの、内心ではこれを好機と捉えました。

アンシイ殿のお婆様がどのような病気に罹っているかは調べなくては分かりませんが、ユグドラシルの法則が通用するのであれば、魔法やアイテムで対処することは可能でしょう。

であれば、拙僧がこの世界の営みに食い込むための手段になり得る。

怪我や病気を治せる人材ということが認知されれば、そうそう無碍には扱われまい。

無論、希望的観測に過ぎませぬが。

人間は時に実利よりも感情を優先する生き物。いくら使い勝手の良い人材がやってきたとしても、見た目や立場など様々な理由を取って付けて迫害してくるのは世の常。

リアルで今尚続く人種差別然り、ユグドラシルの異形種狩り然り、

前例など掃いて捨てるほどありますので。

「ご安心召されよ。拙僧、多才なれば。アンシイ殿のお婆様の病氣、このリンボが治してご覧にいれましょうぞ！」

「ほんと!? やったあー！」

まアそれはそれ。取り敢えずは村へと向かい、アンシイ殿を送り届けてお婆様を治療してから考えましょう。

直接の情報収集は可能であれば行うとして、最低でも病気を治せば良し。拙僧、幼子の願いを切つて捨てるほど外道では御座いませんで。ええ、そうですとも。

「さてさて、そのためにもまずは…」

視線の先には、平地の暗がりにも光を灯して忙しなく動き回る人間の姿。恐らくは何か、いや誰かを探しているのだろう。

「入村拒否されなければ良いのですがね」

「あつ！みんなだ！おーい、おーい！」

出会い頭に攻撃されないといいな。

そんなことを考えつつ、アンシイ殿を探しに来たであろう村人達の方へと歩いていった。

—————

怪しい。

それがリンボという名の男性を見たときの率直な感想でした。

夜になつても姿を見せない娘を村総出で探し回っていたところに、その娘を連れて突然現れた変な格好の大男。しかも猟犬を従えて

やってきたのだから、怪しむなというのが無理というものでしょう。その後の話から、森で危ない目に遭っていた娘を助けていたのだいた事が分かったので、村長は彼に村に入る許可を出していました。

でも本当のところは、早く村から出て行って欲しかった。たぶん、他の皆も同じように考えたんじゃないでしょうか。

狂暴そうな猟犬の手前、そんなことは言えなかったけど。

娘を助けた事につけ込んで何を要求されるか知れたものではないし、何より異端の神を信仰する僧侶だというではないですか。

六大神の一柱であらせられる光の神を差し置いて、よりによって異端の神を崇めるなんて。

光の神を除いた五柱の神であれば許容は出来ませんが、それ以外の神の存在を認めるなど、冒瀆でなくてなんだというのか。

そんなことを考えていたからこそ、自分の目を疑いました。

「では、此れにて治療は終わりで御座います。お加減の程は如何で？」

「りんぼ、おばあちゃんなおったの!？」

信じられなかった。

娘に引つ張られて入っていった奥の部屋。そのベッドに寝かせていた祖母の病を、魔法ひとつで簡単に癒してしまったのだ。

あんなに苦しそうで血の気の失せた顔色をしていたというのに、今は元の顔色に近く、どこかぼうつとしているようではあるけどしつかりと娘と会話をしている。少なくとも苦しんでいるようには見えな

い。

前回の時にいらっしやった神官様でも癒すことが出来なかった病。しかもここまで悪化してしまい、あとはただ死を待つだけだった祖母を彼は難なく癒してみせた。

あり得ない。

傷を癒す力、病を打ち消す力は神が与えてくださった聖なる御業。

深い信仰を捧げる者の中でも、とりわけ魔法の才がある者しか行使することの敵わない選ばれし者の力。

その筈なのに、この男はそれを当たり前のように使い、その上で不治の病を癒してしまった。

つまりそれは、私達と同じ神を信仰する神官様よりも、異端の神を崇めるこの男の方が優れていることの証明だった。

私達の信仰心が、このリンボという男よりも劣っていることの証明だった。

「病は取り除きました。ですが体力が戻ったわけではないので無理は禁物です。よく食べて、ゆっくり寝て、回復に努めていただくのが……ンン？お母様、如何なされたので？」
「おかあさん？」

気が付けば、両手を握り跪いていた、祈っていた。

これは神の思し召し。ああ、きつと光の神が与え給うた試練に違いない。

でなければ、神への信心が揺らぐなんてあるはずがない。あるはずがないんだから。

—————

いやいや、まさか初対面の相手に祈られる事になろうとは、思いもしませんでしたな。

ともあれ、想定外だったのはそれだけで、あとは概ね拙僧が予想した通りの流れになっておりますれば。

アンシィ殿のお婆様のご病気も問題なく取り除くことが出来まし

た。HPの最大値が減少していたことが気掛かりですが、恐らくは病気で体力が落ちた程度の事。きちんと栄養を摂って休息し、適度にリハビリをすれば問題なく過ごせるようになるでしょう。

ついでの目的である情報に関しても、明日改めて聞きに行くことになりました。

本日はもう遅いですし、何よりお婆様と一緒に寝るというアンシー殿のお邪魔をするわけにも参りませんので。

それにお母様もだいぶ神経を磨り減らしていたご様子。余程お婆様のご容態に胸を痛めていらしたのでしょうか。なので早く休んでほしいという意味も込めて、また明日お話ししましょうと拙僧が申し出た次第で。

ちなみに拙僧は今、村の外れに『石の隠れ家』を設置してその中で情報の整理を行っております。

その外側には村の方々の監視がちらほらと。恐らくは村長殿の差配でしょう。

本人達は隠れられているつもりなのでしょうが、生憎と拙僧からは式神を通して丸見えです。

まア疑われるのは想定内ですし、追い出されなかつただけでも良しとして放っておきましょう。

「しかし、ここからどうしたものか」

ふと、情報収集を終えた後の事に意識が向いた。

今情報を集めているのは、この世界について知るため。

ではある程度集め終わったとしたら、次に自分は何をするのか。

やりたいことが無いわけでもないが、急いで取り掛かりたいことでもない。

それに何をするにしても、この世界での強固な足場を作らないこと

には安心して過ごせないでしょう。

色々好き勝手にやった挙げ句に周りから敵視されるなんて想像もしたくありませんので。

「まずは拙僧の立場を明確にしなければなりませんね。ンンン……魔法で病気を治せることが解った事ですし、医者 of 真似事でもしてみるか？ どうも神官が少ないとの事ですし、それなりに需要はありそうですね」

式鴉でマツピングした際に幾つか村を見つけましたので、折を見て行ってみるのもいいでしょうね。

「取り敢えずは、地道に功績を上げて信頼を得ることから始めましょうか」

さあ、ここから拙僧の異世界ライフがスタートしますぞ。目指すものはまだ見えませぬが、そのうち何かしら見つかるでしょう。

ンンン、拙僧、昂って参りましたぞ！

忘れもしませぬ、あれは拙僧がスローライフを満喫していた頃

鍬を振るい畑を耕す。

慣れなかったこの作業も、今ではすっかり板についてしまいました。最初は振った瞬間に取り落とすなど、原因不明の現象に悩まされもしましたが、それもマジックアイテムを使用することによって無事に解決致しました。

拙僧が村に滞在してから実に3ヶ月もの時が経ちましたが、思い描いていたスローライフ計画も順調に進んでおります。

何せこのリンボ、今や広大な土地を開墾し農業を営むまでになりましたので。無論全てが拙僧の管理する土地で御座います。

ンン、分かりますぞ。何故こうなったのか見当もつかぬ、そうお思いでしょう。

では折角ですので、順を追ってご説明致しましょう。拙僧のサクセスストーリーを是非ともご清聴下されば。

まず、アンシイ殿のお婆様を治療した次の日の事ですが、拙僧はこの世界についての情報を入手しました。

ここが約500年前に建国したスレイン法国と呼ばれる国であること。法国の設立には『六大神』と呼ばれ崇められる強大な力を持つ存在が関わっていること。

近隣には比較的新しい国家であるリ・エステーゼ王国とバハルス帝国があること。

これら全てが人間の国家であり、亜人やモンスター等とは基本的に敵対関係にあること。

それら人外を討伐するにあたって、近年新たに『冒険者組合』なる組織が王国と帝国に設立されたこと。

法国では軍隊によるモンスター討伐が行われていたが、神官達が神都へと招集された時期から頻度が減り、代わりにモンスターの目撃情報が増えたこと。

他にも細々としたものがありましたが、得られたのは概ねこのような情報でした。

『六大神』なる存在の事は一先ず置いておくとして。

拙僧は今後の立ち位置を明確にするにあたって、神官達の不足とモンスター討伐の役割に目を付けました。

スレイン法国という国家が宗教に重きを置いているというのもあり、ここ開拓村の住人達の大半は信心深く神官への信頼も厚い。

しかし神官の不在による健康面でのケア不足。加えてモンスターが周囲が増えてきているのではないかという不安が、数年を経て少しずつ国への不満に変わってきているのは明白な事実。

そこで拙僧は閃いたので。

その役割、拙僧が担えば万事解決なのでは？と。

怪我や病を癒し、モンスターを適度に間引いてしまえば、住人達は心身ともに健康になり、ついでに拙僧も人類の護り手としての立ち位置を得られる。まさに良案と言えましょう。

まア、仮に怪しまれたとしても問題は御座いません。

安心安全な生活を保証するにあたって多大なる貢献をしたとなれば、そう易々と手離したくなくなるというのが人の性。庇護を受ける側の内心はどうあれ、事実護られている以上は追い出すわけにはいかなくなることでしょう。

そして読み通り、拙僧の目論みは成功致しました。

近隣の開拓村並びにそれを取り纏める領主にコンタクトをとった

ところ、丁度モンスターによる被害に悩まされていたとの事でした、これらを拙僧の式神による防衛ライン構築によってさきさつと解決。

住人達の健康面に関しても、拙僧が患者のもとへと赴き治療することによって対処していく形となりました。

本当は回復魔法が使える式神を村に1体ずつ置いていく計画だったのですが、試しに召喚したところ住人達には不評だったようです。

式神もつまるところは人外の者。それが村の中に存在するということが受け入れ難かったのでしょう。

ンンン：アンシイ殿は喜んでくれていたのですが、やはり大人と子供では頭の柔軟性が違うようです。

そもそもモンスター討伐に式神を利用しているのは事前に知らせてあるのですから、その辺りもう少し寛容になって頂ければ拙僧が忙しなく走り回る必要もないというのに。

ともあれ、此れにて問題は一拳に解決。晴れて拙僧は怪しき変人から、怪しいけど追い出し辛い変人へとランクアップ致しました。

さて、問題なのはここからです。

防衛ラインを敷き、人々の健康管理を始めてから1ヶ月が経った頃。領主の方から相談があると呼び出されたのです。

その内容というのが、上手い金儲けの遣り方に心当たりはないかという、これまた突拍子もないお話でした。

訳を聞いたところ、どうも先代領主、つまりは現領主の父親が開拓資金や領民たちから納められた税金に手を付けていたらしく、金銭的にかなり追い詰められているとのこと。

現領主がそれを知ったのは、先代が事故死してから急に領地を引き継ぐ事となった半年前。

今までは調度品を売ったり大きな出費をしないように切り詰めて遣り繰りしていたらしいのですが、ここに来て本格的に御家が傾き始めたようです。

この事を領民に知られるのは恥。国に泣きつくなど以ての外。しかしだからといって自分一人でどうにか出来る事でも無し。

悩みに悩んだ挙げ句に、各地を旅してきたという拙僧の知恵を借りたいと思いついたのだとか。

頼み事は理解しました。まさか身元を偽るための旅人設定がここで活かされるとは思いませんでした。これは信頼獲得のチャンス。要は金銭を増やせば良いならば、話は簡単で御座います。

物を売る。これ以上の真つ当な方法はありません。

しかしながら、村にあるのは小麦や野菜。それも領民達が日々の暮らしの中で消費するためのもので、売り物にするには量が足りません。

薬草を売るといふ手もありますが、採集には危険が付き物ですし、それでいてやはり採れる量は多くない。

であるならば、新たに名産品を作る他ありません！

そういうわけで領主殿から土地を貸して頂きまして、そこでユグドラシル産の野菜や果物を栽培し出荷することとなりました。

実のところ、初日に食べた果物を試験的にこつそり育てておりましたので、植えてからの程度で実を付けるのかも検証済みでした。

流石はユグドラシル産というべきか、植えれば1週間も経たずに収穫が出来るのですから驚いたものです。

まア拙僧、農業など初挑戦だったのでそれこそ驚きの連続でしたがね。

例えば冒頭でも触れましたが、農具を扱おうとした途端に手から取り落としたのは予想外でした。

力を緩めたわけでもないのに、気付けば足下に鍬が落ちていたあの状況のなんとも不可思議なこと。

端からみればさぞマヌケに映ったに違いありません。

他の農具や戦士職の武器などでも検証したところ、どうやら装備品に対応する職業を修めていなければ、装備したところで使用出来ないらしいですな。

ンン：残念ですねエ。折角集めた武器防具がただの飾りになってしまいますぞ。

おっと失礼、話が逸れましたな。

取り敢えずはファーマー系統のアイテムを使用可能とするマジックアイテムでその場を凌ぎつつ、苗を植える土壌を整えながら育った作物を領主経由で販売したのですが、これが見事に大当たりしました。

値段の割に質も良く味も素晴らしいと、主に北側の都市で大好評なのだとか。この僅かな期間で領主の懐も潤ったようで、大層ご満悦の様子。

ンン、我ながらナイスアイデアだと自画自賛しておりましたが、まさかここまで評価されるとは思いませんでしたなア。これはもうリンボ・ブランドと称しても良いのでは？

そこで更なる増産のために領主の使える土地を在るだけ借り受け、多数の式神を従業員として栽培に勤しんでいる。というのが、拙僧の現状に御座いますれば。

今は最初の村に近いこの土地で、木霊こだまや芭蕉精ばしよのせいなどの植物に関連する式神がアイテム無しで農具を扱えるのか検証を行いつつ、横でせっせと畑を耕しております。

「おーいーりんぼー！」

「…ンン？おやおやアンシイ殿、よくお越しく下さいました」

式神の様子を確認しつつ鋏を振るっていると、遠くの方から聞き慣れた声が。

そちらを振り返ってみると、拙僧の召喚した見張りの鴉天狗からすてんぐに連れられて、ここ最近の常連様がいらっしやいました。

「あそびにきたよー！わあ、あたらしいしきがみさんだ！」

「流石はアンシイ殿、明敏なる観察力をお持ちで」

「めいびん?」

「ンン失敬、とても賢いという意味で御座います」

この世界に転移してから初めて出会った少女であるアンシイ殿は、時折こうして遊びに来られるのです。

仕事を眺めていたり式神を観察したり、拙僧の旅の話を聞きたがったりと実に好奇心が旺盛で、お相手をしていると此方まで愉しくなってしまう。

「そういうえば、お婆様の具合はどうです?また体調を崩されていますか?」

「うん、とつてもげんき!りんぼにもらったくだものもぜんぶたべちゃった!」

「それは重畳。食欲があるのは健康な証ですからな。よければまた幾つか差し上げましょう」

「ほんと!?ありがとー!りんぼだいすき!」

正直なところ、信頼獲得の1番の成果は彼女ではないかと思うのです。未だに疑惑の眼差しを向けられる状況で、此れ程までに純真無垢な好意をぶつけられると心が洗われるようで、不覚にも涙腺が緩みそうになりますぞ。

これはいずれ、何らかの形で恩を返さなくてはなりませんね。

先立って彼女には秘密裏に護衛を付けておきましょう。何かと危なっかしいところがありますから、もしもの時にはそつと手助けするように命じておきませんとな。

「では此方へ。さてきて、本日はどのようなお話を致しましょうか」

「……部隊の編成はどうなっているのだ？」

「芳しくはありません。やはり大森林での被害が尾を引いているようで、信仰に揺らぎが出ている者もいると聞いています」

「裏切り者共からの攻撃はともかく、生息する強大な魔獣が相手となれば無理もない。地形も奴らに味方をしている」

「隊員のれべりんぐも間に合っておらん。神官達も全力を尽くしてはいるものの、魔力には限度がある。あれほどの大規模訓練を続けて大した成果が上がらんのであれば、中止も検討すべきだろう」

「辺境の村を切り捨ててまで呼び戻したというのに、この体たらくか」
「言うな。それは我らの会合で決まったこと。責任は全員にある」

とある場所、とある部屋。

神官らしき服を身に付けた老齡の男女6人が円卓を囲んでいた。

「漆黒聖典が現存していれば、このような……」

「もう20年も前のことだ。今更何を言っても無駄だということが分からんか」

「漆黒聖典再編の目処は立っておらん。その肩書きに見合う強者が現れるのを待つ他なからう。唯一残ったアレも使い物にならんしな」

「……まだ続けているのか？いくら忌み子相手とはいえ……」

その言葉に、周りの5人は気付かれぬ程度に目を逸らした。その言葉の意味がどういふものか知っていて、それでいて関わりたくはないと誰もが思っていたからだ。

「……次の議題です。先程話に出た辺境の領地で起こっている事について、新たな情報が入りました」

「例の果実の製作者か」

「ええ、我々が切り捨てた人々を救った事から、害はないと判断していましたが、少しばかり雲行きが怪しくなりました」
「なに？」

「どうやら果実を作っているのは遠方から旅をしてきた僧侶らしいのですが、人々の守護にその僧侶本人が召喚したモンスターを使っているそうです」

「モンスターだと？」

「…風花聖典の調査によれば、果樹園の警邏にあたっているバードマンのようなモンスターが確認されたとのことです。内部を探ろうとしたところ、察知されたため撤退してきたと報告にはあります」

「……人類の敵か」

「そう決めるのは早計では？現にその僧侶は人々を守護しているのでしょう？」

「そもそもが異端の神を崇める狂人だろう。何を企んでいるか知れたものではない」

「その果実とやらもモンスターが生み出したものではないのか？なんと穢らわしい……」

「異教徒など所詮は……」

「静粛に」

「……私はその僧侶を利用すべきだと考えています」

「利用だと？隊員のれべりんぐにでも駆り出すか？」

「いいえ、裏切り者への処罰に使います」

「ほう？」

「風花聖典を恐れさせる程のモンスターを使役するのであれば、連中に差し向けるのが合理的な使い方でしょう。上手く行けばこちらの損耗を抑えつつ大森林を突破出来るでしょう」

「確かに有益な利用方法だな。異教徒ごとき、たとえ死んだとしても国には何の被害もない」

「その場合、例の果樹園も国営機関として収奪すれば資金調達の一助となります。今後、王国や帝国への交渉にも使えるでしょう」

「…私はこの案に賛成だ」

「私もだ」

「思うところはありますが、人類のためというのなら」

「…:では、満場一致で賛成ということだ」

「それで、どうする。異教徒がまともに交渉の席に座るとは思えんのだが?」

「その対策はすでに講じています。相手がモンスターを使役する以上、何かを仕掛けられる前に行動を封じてしまうのが得策かと。その僧侶と関わりの深い人間を人質に使い、交渉の席に縛り付けることにしましょう」

「…やむを得んか。我々にも余裕がない」

「非道な行いではあるが、相応の利益が生まれるのであれば…痛みを伴うのも堪えましょう」

「全ては人類の安寧のため。これも仕方のない事なのです」

6人は一様に頷いた。

頷いてしまったのだ。

忘れもしませぬ、あれは拙僧が隊長殿の苦惱を覗き視ていた頃

馬車に揺られてどれほどの時間が経っただろうか。

正直なところ気分が悪い。ここのところ整備されてない道ばかり通るので、当然馬車はガタガタと酷い揺れを起こす。だから酔ったのだろう、そうに違いない。

決して、これから起こる事に対して思い悩んでいるのではないと信じたい。

「隊長、どうされました？」

「…商人のペルレスだ。貴様は付き人のモラック、そうだな？」
「し、失礼しました、ペルレス殿」

尤も、部下の方はそれを取り繕う余裕もないらしい。
無理もない。これから行われる行為は国民への裏切りには他ならぬのだから。

法国上層部から、例のリンボなる怪僧の脅迫が命じられたのは数日前。その命令を実行すべく、我々は果実を買い付けに行く商人として、グランブ領主の管理する片田舎へと向かっている。

関所を越えたところで秘密裏に現地部隊と合流し、我々は商談と称して対象と接触する予定となっている。その間、別働隊は怪僧を封じるための裏工作をする手筈となっているのだが…。

(だが、気に食わん。何故法国の…しかも年端も行かぬ子供を脅迫の道具に使わねばならんのだ)

上層部が決定した筋書きでは、リンボを法国の暗部へと縛り付け傀儡とするために、近隣に住む少女を人質として利用する事になってい

る。

理屈は理解できる。人質に限らずとも、相手の弱みに漬け込んで此方の思惑通りに動かすという行為は合理的な策略だ。

だが相手が異教徒たる怪僧であることを差し引いたとしても、神々の加護を受けて育った自国の民を、ましてや未来を担うべき新しき命を贅とするこの行いは、とても容認出来るものではない。

(憎しみに振り回されるあまり、ついに耄碌したか。信仰が建前に成り下がったのだとすれば、いよいよ先が無いな)

少し考えれば理解できるはずだ。

異教徒相手にスレイン法国の人間が人質に使えろと判断したということは、少なくとも両者は良好な関係を築けていると認識しているということ。

ならば全てではなくとも、こちら側の事情を話した上で協力を要請する方が合理的だ。たとえば貸しを作る事になっても、蟠わたかまりが残らないのであれば後々敵対する可能性も下がるだろう。

現にその怪僧は上層部が切り捨てた辺境の人々に救いの手を差し伸べ、モンスターへの盾となるばかりか食糧事情の大規模な改革まで行ったという。

風の神を信仰するものとしては異教徒の活躍を手放しには喜べないが、今後これが続けて貰えるならば、自国の食料事情のみならず他国への交易にも大いに利用できるだろう。

だからこそ、表面だけでも良好な関係を構築する事が最善なのだ。上層部、いや神官長たちもそれくらいの事に気が付かないはずはない。

(20年前のアレが発端だろうか…)

その判断に理由があるのだとすれば、間違いなくあの事件が原因だろう。

スレイン王国の切り札と呼ばれていた女が、当時協力関係にあったエルフの国の王に拐われ、穢らわしき子を孕まされたあの一件。

当時の私は訓練生として研鑽を積んでいた時期だったので直接の関わりはなかったが、後にこの事件の詳細を知った時には言葉を失った。

対象を救出することには成功したものの、奪還に向かった法国最強の部隊である漆黒聖典の大半が殺害され、遺体の回収すら叶わなかったという。

遺体がなければ蘇生は不可能であることから、これで漆黒聖典は事実上の壊滅。

救出対象である彼女を除き、生きて帰った少数の隊員もこの20年の間に治療不可能な病が原因で亡くなったそうだ。

漆黒聖典再編の見通しは未だ立たず、その肩書きに相応しい強者の誕生をただ待つしかない状況だという。

この一件があつたからこそ、上層部はエルフの王、延いてはエルフという種族そのものを憎悪し、共存から殲滅へと方向転換した。無論、この理屈も理解できる。

だが憎悪に囚われるあまりに、神官長たちの決定は何処か短絡的なものになりつつある。

加えてエルフの裏切りがあつてから、六大神が造り上げたスレイン王国以外の存在を軽んじ、敵視する傾向が強まったように思えてならない。

エルフとの戦争についても、態勢が満足に整っていない状況下での指令で開戦した。

侵攻ルートとの確保を目的とした第一段階の作戦だが、地の利を活かしたエルフの戦術と強大な大森林の魔獣によって阻まれ、何一つとして戦果は上がっていないと聞く。

(それが今回の浅慮な指示に繋がったのだとすれば、いよいよもつて

法国の頭脳は腐り落ちる寸前だろうよ)

それを察知している者たちは少なくない。

徹底した情報統制のおかげで、国民はエルフの件や上層部の思想を知らずに日々を過ごしている。

だが国の暗部に関わる者たちの中には、神官長たちへの疑念が芽生え始めていると聞く。

これを放置すれば法国内部に深刻な亀裂が生じることとなるだろう。そうなればエルフとの戦争どころの話ではない。

どうにかしてこの嫌な流れを断ち切らねばならない。

これ以上の無様を晒しては、神威を以て人類を救済してくださいと六大神の皆々様に顔向け出来ない。

(今の神官長を説得するのは厳しい。とはいえ下手な行動を起こせば内部分裂を押し進めることに……)

とは言ったものの、すぐに上手い考えが浮かんでくるわけもなく。

対面する部下の心配を余所に、商人ペルレス改め風花聖典隊長は、白髪が目立ち始めた頭を抱えることになったのだった。

—————

「——成る程、そういう事でしたか」

顛末の一部始終を読み終えて、記憶の海から浮上する。

目の前の木製のベッドには、先程の記憶の持ち主である商人ペルレスが横たわっております。

ここは領主グランブ殿にお借りしている一室。

本来ならば商談に使われるべき部屋なのですが、今は限定的に尋問室として利用させて頂いております。

承諾は得ておりませぬが、グランブ殿をお国の厄介事に巻き込むわけにもいきませんし、ここは寛大なお心で許して頂くとしましょう。まあそもそも屋敷を使っている時点で手遅れな気もしなくはないですが、バレなければいい話なので。

「ご主人様、何か収穫はございましたか？」

と、背後から声を掛けられました。

振り向くとそこには、青を基調とした和装で艶やかに着飾った金髪の美女がおりました。

しかし金色の毛を蓄えた九本の尻尾とぴんと立った三角の獣耳が、彼女が単なる人間ではないと証明しております。

良い機会ですのでご紹介しましょう。

是なるは『白面金毛九尾の狐』。拙僧が特殊な手法を用いて召喚した、妖狐の最上位とも呼べる存在に御座いますれば。

こここのところ頭脳労働役が足りなくなつたので、試しにと召喚した副官で御座います。

「えエ、どうやらアタリを引けたようで。スレイン法国の特殊部隊、風花聖典とやらの隊長らしいですな」

「はあ、コレが隊長ですか。まあアンシイちゃんの周りをうろちよろしてた人間のレベルを考えればこんなものですよね」

彼女が言っているのは他の風花聖典の事でしょう。

先日、アンシイ殿の周囲に怪しい影ありとの報告を護衛の式神達から受けまして、指示を出して捕縛。今のように記憶を読み取ったところ、法国の暗部に関わる者達だと判明しました。

その者達の記憶から、新たな作戦実行のため追加人員が送られて来

る事が判明しましたので、こうして網を張って待ち構えていた次第にて。

関所を越えたところで馬車ごと捕獲。転移で屋敷へと直行し改めて記憶を覗いておりました。

ンンン、ご安心をば。捕らえた皆様は無傷で眠らせた上で隔離しております。安易に命を奪うような真似は致しませんとも、えエ、そうですとも。

「しつかしまあ、ご主人様も隅に置けませんねえ。国家お抱えの軍人が刺客に送られるなんて、どんな悪行を仕出かしたので？」

「はて、拙僧とんと心当たりが御座いませぬが。ただ人々の幸福を願ひ、生活の助けになればとお力添えをしただけでして」

「真面目に返さないでくれますう？言動の割にユーモアセンスが無いからお友達が少ないんですよアナタは」

「えっ、急に辛辣では？」

「…まあでも、ご主人様らしいですわね。ユグドラシルの頃から変わっていないようで安心しましたわ」

言葉の割にはやれやれといった風に、傍に設置したシングルソファアーに腰を下ろした『白面金毛九尾の狐』

然り気無くともんでもない事が聞こえた気がしたが、今話すことではないので置いておくとしましよう。

「ンンツ、兎も角、情報共有を。どうやら法国首脳陣は、拙僧を取り込み戦争へと駆り出す事が目的だったようで。その交渉材料としてアーンシイ殿を人質にするつもりだったようですが…」

「流石に安直すぎないですか？とても人類の守護者(自称)を500年も続けてきたとは思えない単細胞思考なんですか？」

「そこは同意するところですか。どうも戦争相手のエルフ、というよりはエルフの王が原因で起きた事件のせいで、神官長達の自国以外への悪感情が高まっているようでして」

「要するに、俺達の国以外みんなクソ！っていう思い込みで、初手から相手を舐め腐っている状態というわけですね。尤も自国の民を人質に使う判断を下した以上、正常な判断そのものが出来なくなってるっぼいですけど」

「部下にさえそれらを見透かされてしまいましたからね。恐らくは入れ替えられるのも時間の問題でしょう」

風花聖典隊長の記憶を覗く限りでは、他の六色聖典や司法機関の一部の人間にも、度重なる判断の正否を疑問視されているらしい。

今は在籍年数と過去の貢献により大目に見られている節があるが、次に何かあればその座から引き摺り下ろされるだろうと踏んでいる。

「それは良いとして、反撃いたしますの？万が一相手側が世界級アイテムを保持していたとしても、ワタクシ私とご主人様がいれば殲滅は容易だと思えますよ」

「いえいえ、殲滅は致しませんとも。戦力としては何ら心配はないのですが、首脳陣を滅ぼしたとなれば、法国の民は路頭に迷う事となりましょう」

「え、そこ心配します？」

「無論。我々は所詮部外者ですから、滅ぼしたところで身の振り方などどうとでも出来ましょう。」

しかしスレイン法国は首脳陣の決定ひとつでどうとでも動く国。その庇護のもとで過ごす人々はきつと困り果ててしまう。無能な社長の不始末で社員や顧客が被害を受けるなどあつてはならぬ事です。

ゆえにここは穩便に、それでいて容赦なく。

彼方側の抱える問題解決を以て、優しく丁寧に反抗の芽を摘ませて頂くとうとうしよう」

「あらま、スツゴい悪い顔なってますわよ」

「ンンン、それはそうです。実害が無かったとはいえ、儂の大切な友人に手を出そうとしたその報い。確とその身に叩き込まねば気が済まぬというもの」

「じゃあこの風花聖典とやらは始末しておきます?」

「保留で。彼らにも葛藤はあったようですし、何より責任を負うべきは指示を下した側でしょうや。それはそれとして利用させてもらいますかね」

「キヤー!ご主人様の貴重な悪役ムーヴ!見た目に反して似合わない☆」

「ソッフ、お褒めに預かり光栄で御座います」

「褒めてねーですけどお?」

和気藹々としたやり取りとは裏腹に、スレイン法国の変革という一大事が、こうして誰に気付かれる事なく動き出そうとしていた。

忘れもしませぬ、あれは拙僧が大森林へと乗り込んだ頃

心地の良い日差しが降り注ぐ、よく晴れた昼下がりに。

今日も今日とて式神達が働く農園に、小さなお客様がやってきた。

「りんぼー！あーそーぼー！」

彼女の名はアンシイ。この農園が出来てからというもの、ほとんど毎日のようにやって来てはD・O・M・A・N改めりんぼさんと遊んだり勉強したりしていく5歳の女の子だ。

同年代の子供と比べても活発で物覚えもよく、未だにりんぼさんに対して警戒心を抱く村の人々とは対称的に彼にはよく懐いている。

「……あれえ？」

何時もならば農園で土いじりをしているか、いなくても呼んだらすぐに出てきてくれる筈のりんぼさんが現れない事に首を傾げるアンシイ。

放っておくのも忍びない。そろそろ声をかけて差し上げましょう。

「あらまあ、アンシイちゃんではありませんか」

「——あつ、はくのちゃん！」

真横に突如として現れた私わたくしに対してもさして動じることなく、アンシイは元氣よく駆け寄ってくる。りんぼさんが出会った当初は熊に怯えていたと聞かされましたが、どうにもその姿が想像できない。この歳にしては肝が据わってませんか？

そうそう、『ハクノ』というのはわたくしでの私わたくしの名でございます。

流石に『白面金毛九尾の狐』では呼び難いですし、真名を易々と晒

すのは危険が伴うというもの。

というわけで真名から一部抜き出して名乗らせて頂いております。姿形も人間と遜色ないように変化させておりますので、早々見破られはしないでしょう。

「ようこそおいでくださいました。お出迎えが遅れてごめんなさいね」

「んーん、だいじょうぶだよ。きょうはりんぼいないの?」

「そうなんですよお。リンボさんは急なご予定が入ってしまいましたて、今朝早くにお出掛けになりましたわ」

「そっかー…」

今日もリンボさんの面白いお話が聞けると思っていたアンシイはしよんぼりと肩を落とした。いつも楽しげにお話ししていましたもののね。この姿を見たら彼は一目散に飛んで来そうですね。

「そう気を落とさないでくださいまし。そこまで時間の掛かる用事でもありませんし、正午までにはお戻りになりますわ」

「うーん、じゃあまってるー…ここであそんでてもいいー?」

「勿論構いませんとも。宜しければ昼餉おひるも食べていかれますんこと?新しく栽培を始めたお野菜が収穫できそうですので、味見などしていただけると嬉しいのですが」

「うんっ…ここのおやさしい、ぜんぶおいしいからたのしみ!」

寂しそうな顔から一転して、ニコニコと元気よく駆け出していくアンシイを見送りつつ、念話にて農園の式神達に指示を出していく。

新しい畑の土壌改良、程よく実った野菜果物の収穫と出荷準備、取引先の管理などなど、重要な案件から雑務までやるべきことは山ほどあるが、これらを捌くことなど超敏腕秘書でもある私わたくしにとっては片手間で済む事。

「ふむふむ、防衛網に異常無し。そろそろ失踪した風花聖典の捜索に来る頃かとも思いましたが、なかなか動きませんね。送れる人員がないのか、或いは欠片程度でも危機感が蘇ったのでしょうか？」

話に聞くスレイン法国首脳陣であれば前者の理由なのだろうが、それはこの際どちらでも良い。リンボさんは既に頭の足りない神官長達を椅子から引き摺り下ろすべく行動を開始している。

「さてさて。計画に修正は必要なさそうですし、リンボさんには順調だとお伝えしておきましょうか。向こうもそろそろ終わる頃合いでしょうし」

エイヴァーシャー大森林。

スレイン法国の南方に広がる、読んで字の如く広大な森林地帯である。

その法国の領土よりも遥かに広い面積を誇る上に、鬱蒼とした樹木が絡み合い侵入者の行手を阻むその様はまるで天然の要塞。

その森林、というよりは大樹海の奥深くに、エルフの王国は存在する。

樹海内部に蓋をして覆い隠すような樹木のせいで上空からの観測は難しく、そこに生息する強力な魔獣達による妨害のせいで踏み込むことは容易では無い。

なるほど、スレイン法国の兵士が未だにエルフの王国どころか、侵攻ルートの確保にすら手間取っているのも理解できる。この調子では向こう50年は道を切り拓くことに専念することになるだろう。

とはいえ、そんな事はこの男にとっては全くと言っていいほど関係の無い事なのだろうが。

「シン、成程……王国の内部はこのような……」

エルフの王国の近隣にある巨大な三日月状の湖。そこに秘密裏に拠点を構えている怪僧リンボは、配下の魔獣達を巧みに操りエルフ王国の内部構造を解析していた。

木々に留まる鳥、地を這う蛇、潜伏する蜘蛛に狼。全てこの男が召喚したという事実が未だに信じ難く、恐ろしい。その総数は100やそこらではないのだから。

スレイン法国の歴史を遡っても、魔法で維持できる召喚獣の数が5体を上回る者は存在しない。へ生まれながらの異能<が関係しているならあり得るか、いいやそれを考慮してもこの数は逸脱者の域を超えている。

「——ふむふむ、城下町にあたる部分はこのくらいでしょうかな？成程、エルフツリー……特定の魔法を使用する事で攻防に優れた性質を発現する植物とは、まだまだ拙僧の知らぬ事は山のようにある。ンツフツフ、愉快愉快！」

魔法が付与されているだろう羽ペンで紙面いっぱいにはびつしりと書き出したエルフ王国、引いては樹海内部の図面を丁寧に片してテーブルの隅に纏める。別紙には出現するモンスターの種類や推定難度、生息域が事細かに綴られていた。

一体、これにどれほどの価値があるのか理解しているのだろうか？攻め込む側にとっては金塊に等しい情報を、この男は湯水のように量産していく。

「——ひとつ、宜しいか」

「おや、どうかなさいましたか？ペルレス殿」

更に王城にまで範囲を拡大しようとしていた怪僧を呼び止める。

くるりと此方を向いたその姿には、やはり敵意も警戒心も感じられなかった。

「何故、私をここへと連れてきた？他の隊員はあの女の監視下で果樹園での作業に従事しているそうだが」

「ンン、端的に申し上げれば信用して頂く為ですとも。少なくとも貴殿らへの害意が無いことを証明し、今後の信頼関係の構築に役立てようかと」

「今後、とは？」

「この際ハッキリと言わせて頂きますが、拙僧は貴殿らの国の首脳陣、神官長と言いましたかな？彼ら彼女らに良き印象を抱いてはおりませぬ」

「……………」

スツと目を細められて言われたセリフには思い当たる節はある。恐らくこの男は、神官長達が人質を使つて自身を脅迫するつもりだということや予め知っていたのだろう。そうでなければ、我々風花聖典がこうまで後手に回る事など無かつたはずだ。

尤も今となつては、計画通りに事が進んでいたとしても抵抗虚しく擦り潰されていたとは思えないが。

「ですので、今の神官長達にはその椅子から降りて頂くつもりです。勿論タダでは動かぬでしょうから、エルフ王国での功績と六色聖典である皆様の協力が不可欠になります。そのために、協力するに足ると思つて頂けるような信頼関係を築きたく」

「つまりは、老害を追い落とす協力者として我々を必要としていると」
「然り。彼ら彼女らの行いは些か度が過ぎるというもの。拙僧は法国の皆様への信仰を否定する事も蔑む事も致しませぬがしかし、怨恨にて紡がれた言葉には果たして、神の志は宿るのでしょうか？」

我が国の内情を知られていることについては、最早何も言うまい。

あれだけの術を行使できる逸脱者だ。どのような手段であれ、情報を握られていることに不思議はない。

神官長達は暴走しかけている。このままいけば六大神への信仰を建前に更なる騒動を起こしかねない。それは現政権を危険視する法国内の者達の共通の認識だった。

であるならば、リンボの提案には一考の価値はある。

以前から政権交代の切っ掛けを掴むべく方々に根回しを行っていた派閥が存在するのだが、このままでは時間が掛かり過ぎると思っただけではない。

しかしこれを機に聖域にて膨れ上がった膿みを始末できる明確な理由が生まれるのであれば、これほど都合の良い事はない。

だがそれ以上の懸念もある。

今回の一件が万事上手く進んだとして、それはリンボに政権へ取り入る為の口実を与えかねない。

そうでなくともこの男の保有する武力を背景に出されれば、如何に人類の守護者たるスレイン法国であろうとも逆らう事などできないのではないか？

「この場で結論を出して頂く必要は御座いませぬ。隊員の皆様とよく相談していただければ」

「随分と寛大なのだな。我々が何を仕出かそうとしていたのか、知らぬわけではあるまい」

「えエ、それはまあ。しかしながら、それは貴殿らの納得できるやり方では無かったのでしょうか？」

「…フ、何処まで知っているのやら」

「であるからこそ、風花聖典の皆様と手を取り合えると思いつたのです。貴殿らであれば、今の法国をより良い未来へと導けると信じておりますので」

だがどういう訳か、この男ならばスレイン法国に対して誠実に向き合ってくれるのではないかという奇妙な信頼感が生まれつつあった。

この男の今までの様子を見ると、そう断言するほどの確証はないというのに、信じてみても良いのではないかと思えてしまう。

「…どの道、我々に拒否権は無さそうだな。分かった、部下はなんとか説得してみよう」

「ンン、宜しいので？断ったからといって危害を加えるつもりはありませんが」

「法国の先行きを憂いているのは我々と同じこと。それに順当に事が進めば風花聖典の隊長である私には、次期神官長として立つ資格が与えられるだろう。それだけでも十分な見返りだとも」

スレイン法国の暗部たる六色聖典のひとつを任されているものが、事もあるうに地位を求めて異教徒の怪僧と手を組むなど前代未聞だ。背信行為に他ならないと石を投げられても文句は言えない。

しかし、ここがスレイン法国にとっての分水嶺だということは直感的に理解できた。

ここで手を取らねば、祖国は誤った道を進む羽目になる。遙か先、100年か200年かは分からないが、なにか致命的な一撃で全てが崩れ去る。そんな妄想じみた予感さえあった。

「リンボ殿。スレイン法国の未来のために、貴方の力を利用させてもらおう」

だから、この手を取ることにしよう。全ては祖国の更なる発展と、人類の安寧のために。

きつとこの選択を我らが神は赦してくださいと信じて。